

とらびら 北の

vol.121

令和2年8月



HOKKAIDO
ARTS FOUNDATION

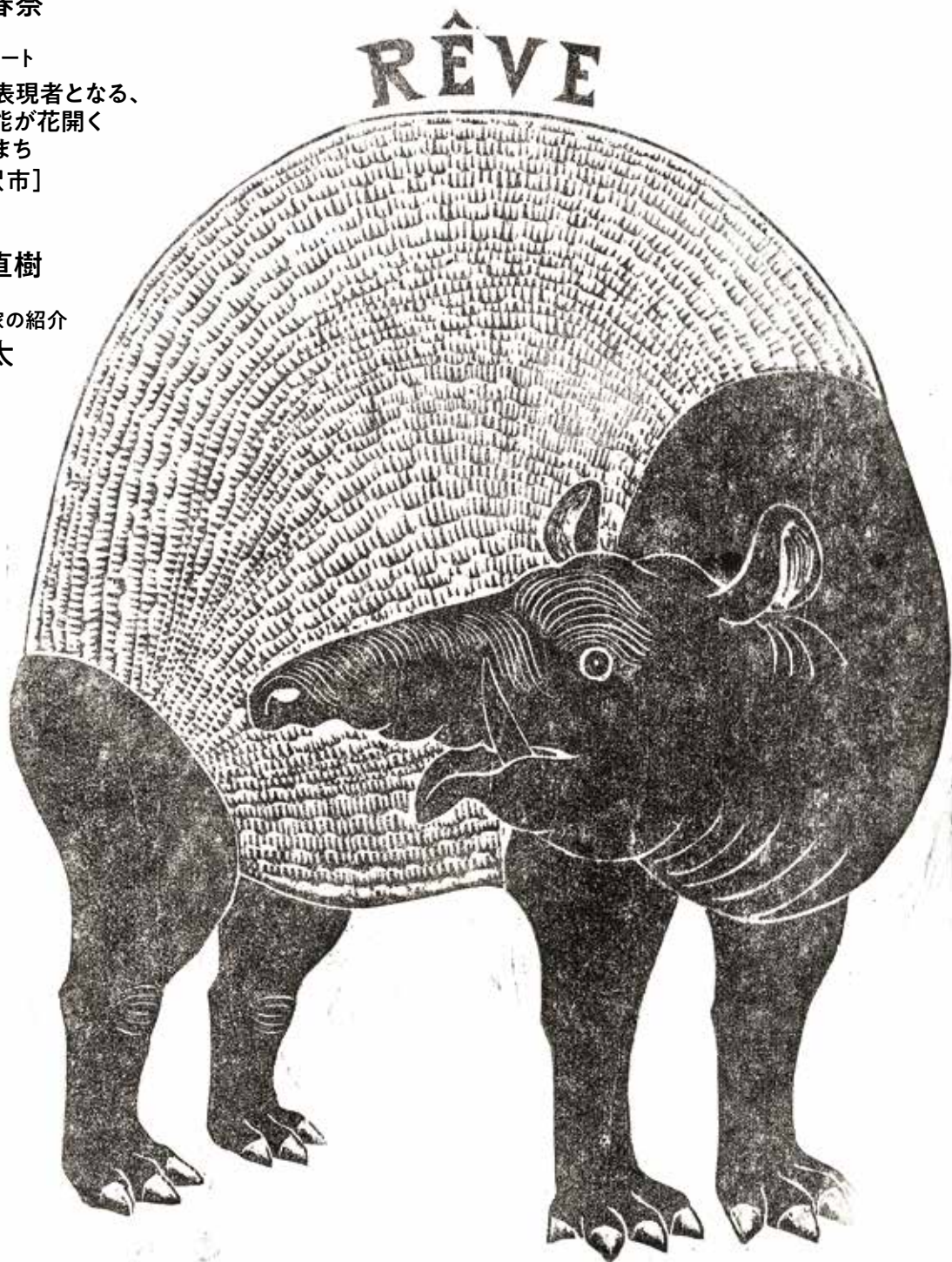
特集
北海道の映画文化
映画が引き出す
人と地域の可能性

この人に注目
椎名 春奈

街歩きアート
次代の表現者となる、
若き才能が花開く
青春のまち
[岩見沢市]

エッセイ
石川 直樹

表紙作家の紹介
北村 太





◎特集 北海道の映画文化

函館を舞台にした『海炭市叙景』の撮影風景。帯広市出身の熊切和嘉さんが監督を務めた
©2010佐藤泰志／「海炭市叙景」製作委員会

映画が引き出す 人と地域の可能性

映画ロケ地の宝庫・北海道。近年では函館や室蘭で、市民による映画づくりが行われ、地域の新しい魅力を掘り起こしています。地域での市民主体の上映活動が続くなか、個性的な映画祭も盛んに開催され、北海道の映画文化が大きな広がりを見せています。



©2010佐藤泰志／「海炭市叙景」製作委員会

佐藤泰志×函館ロケが
まちの活性化の呼びびに

『海炭市叙景』（2010年）『このみにて光輝く』（14年）『オーパー・フェンス』（16年）『きみの鳥はうたえる』（18年）。函館をロケ地としたこれら4本の映画は、大手映画会社による製作ではなく、函館市民の一人がプロデューサーを務めています。函館で映画館「シネマアイリス」を経営する菅原和博さんです。

30年以上にわたり、函館で映画の上映活動に携わる菅原さん。映画づくりに乗り出したきっかけは2008年、地元出身の作家・佐藤泰志さん（1949〜90）の小説を手にとったことでした。

故郷・函館を想起させる数多くの小説を残した佐藤さんは、芥川賞候補に5度も挙げられながら、41歳の若さで命を絶ちました。

菅原さんは、自分の住む街をモデルに、ひっそりと生きる人々の思いが繊細に綴られた内容に衝撃を受け、映画化を決意。以降、佐藤文学にこだわった映画を企画し続けています。



©2010佐藤泰志 / 「海炭市叙景」製作委員会



莫大な費用や制作環境を支えるため、菅原さんは毎回市民の協力を仰いでいます。たとえば「海炭市叙景」では、市民有志と製作実行委員会を設立。街頭での募金活動や朗読イベントなどを行い、個人や地元企業から寄せられた協賛金を製作費の一部に充てました。また、ロケ地探しや撮影隊の食事手配、主要キャストの一部までも市民が担当。菅原さんは「映画ファンだけでなく、佐藤文学を愛する人たちや函館の街を元気にしたいと願う若者たちの存在が大きな原動力になりました」と話します。

こうして作られたシリーズ作品には、寂れた街角やありふれた店など、「美しい観光都市」という従来のイメージとは異なる函館の風景が登場します。原作の世界観を反映しつつ、普遍的な地方都市の有り様を浮き彫りにする作風が評価を受け、「そのみにて光輝く」（呉美保監督）は、カナダ・モントリオール世界映画祭で最優秀監督賞に選ばれるなど国内外で映画賞に輝きました。

シリーズの試みは、佐藤文学の復活にもつながるなど、さまざま

起こし、地域の絆を深めました。

地域の映画文化を支える 市民主体の上映活動

地域で映画製作が積極的に取り組まれていく背景には、長く活動が続いている市民主体の映画館や映画祭の存在があります。

北海道には、菅原さんが代表を務める函館の「シネマアイリス」のほか、札幌の「シアターキノ」、苫小牧の「シネマ・トールラス」と、市民出資型の映画館が3館あります。各館とも地元の映画ファンが資金を出し合って20年以上前に開業し、今も市民ボランティアが運営を支えています。また、浦河に



市民活動で取り壊しから一転、保存が決まった旧給納小学校も『モルセラニの霧の中』のロケ地となっている
©2020「モルセラニの霧の中」NPO法人 室蘭映画製作応援団

な反響を呼んでいます。地元メディアで取り上げられ、ロケ地マップも誕生。映画づくりによるまちの活性化の取り組みが認められ、菅原さんは2018年に函館市文化賞を受賞しました。「函館が生んだ類まれなる作家の小説を地元で映画化し続けることが私のライフワークです」と菅原さんは語ります。

室蘭の街と人が生んだ 『モルセラニの霧の中』

室蘭では昨年、市民でつくるNPO法人「室蘭映画製作応援団」が応援する『モルセラニの霧の中』が完成しました。監督は室蘭生まれの坪川拓史さん。2014年春の克蘭クインから5年の歳月を掛けたオムニバス映画です。

室蘭で、多くの市民が長期間にわたって映画づくりに携わったのは、この作品が初めて。発端は、2011年に東京からUターンした坪川監督が、「ここは何もないところでしょ」という地元の人からの挨拶代わりの言葉に触発されたことでした。

ある創業102年の老舗劇場「大黒座」も、市民団体が経営を応援しています。

函館で1995年から続く「函館イルミネーション映画祭」は、シナリオ公募も行う発信型の映画祭です。また、全国的に名を知られた「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」は若手監督の登竜門的存在。新型コロナウィルスの影響で今年オンライン開催（9月18日〜22日）となりますが、会期を冬から夏に移行したこともあり、今後の展開に注目が寄せられています。ほかに、国内外の最新ショートフィルムを集める「札幌国際短編映画祭」、世界でも珍しい空港の映画館を会場とし

た「新千歳空港国際アニメーション映画祭」、網走らしさにこだわった作品選定や企画が特色の「オホーツク網走フィルムフェスティバル」などがあります。

どの映画祭も、会場運営や物販などを手伝い、アットホームな雰囲気イベントを盛り上げる市民スタッフの存在は欠かせません。ゲストの映画人と交流できる機会も多く、市民が映画の素晴らしさを知る貴重な機会にもなっています。

映画づくりを身近に感じ、主体的に関わろうとする人材が育まれている北海道。地域の映画文化を支え、映画と地域の関わりの新しい可能性を発信しています。

室蘭を含む西胆振エリアには、旧給納（えとも）小学校の円形校舎など味のある古い建造物が残り、イタンキ浜や工場群といった独特な景観が広がっています。「映画になる場所がある」という思いを抱いた坪川監督は、市民から聞いたエピソードを基に脚本を執筆。その熱意に心動かされた地元ラジオ局の社長や会社員らが応援団を結成したのです。

応援団のメンバーは撮影隊への炊き出しやロケの手配などに奔走。資金集めに苦労しながらも、クラウドファンディングを活用し、道内外のサポーターから支援を得て何とか乗り切りました。

出来上がった『モルセラニの霧の中』は7章構成。同じまちに暮らす老若男女の人生が、四季の変化とともに幻想的な映像美で描かれています。2018年に急逝した大杉漣さんら俳優とともに出演した市民キャストは、延べ2000人。エピソードに関わる市民本人が登場するシーンもあり、不思議な臨場感が醸し出されました。

室蘭の記憶と風景を刻んだこの映画は、まちの新たな魅力を掘り



函館で質の高い映画を作り続ける「シネマアイリス」



市民向け映画講座や映像教育にも取り組んできた「シアターキノ」



デジタル化の波も市民募金で乗り切った「シネマ・トールラス」

椎名 春奈

Shiina Haruna

オカリナ奏者

この人に注目!



オカリナは古代からある笛の一種で、19世紀のイタリアで近代楽器 Ocarina (オカリーナ) になったとされています。郷愁を誘う素朴で温かい音色は、多くの人を魅了してきました。札幌を拠点に活動する椎名春奈さんも、オカリナの不思議な魅力に惹かれ、演奏家の道を歩んだ一人です。

椎名さんは中学生の頃からフルートに親しみ、企業の吹奏楽団のメンバーとなるなど長くフルート奏者として活動してきました。オカリナを初めて手にしたのは、音楽教室の講師として、フルートと同じ管楽器であるオカリナも教えることになったとき。最初は「簡単に吹ける楽器」という印象だったそうですが、フルートのコンサートの間にもオカリナを演奏すると大きな反響があり、改めてオカリナの魅力に気づかされたと言います。

その後、全国的なオカリナコンクールにも出場し、2015年にはオカリナ奏者・宗次郎の楽曲を演奏して念願の1位に。その縁から名寄市で行われた宗次郎氏のコンサートで前座の一人を務めるなど、活躍の場が広がっていきました。「オカリナで共演したとき、オーケストラのフルート奏者にも『心が震えた』と言われました。オカリナの音色には、人の心に響くなにかがあると思います」と椎名さんは言います。

椎名さんは「トリプルオカリナ」という近年開発された新しい楽器の演奏にも、早くから取り組んできました。トリプルオカリナは、音域の異なる3つのオカリナを1つにしたもので、3つの口をスライドさせて吹くのが特徴です。一般的なオカリナに比べて広い音域が出せるので、複雑な曲も1本で演奏が可能となり、幅広い表現ができます。そのトリプルオカリナの第一人者・大沢聡氏に、道内で唯一認定された講師として活動する椎名さん。2019年には大阪国際音楽コンクール民俗楽器部門にトリプルオカリナで出場し、1位に輝きました。

「オカリナは今も進化し続けている楽器で、標準化されていないことが最大の魅力」と言う椎名さん。コロナ禍で家にいる機会が多い今こそ、オカリナという楽器を知り親しんでもらうチャンスと捉えて、その魅力を発信し続けています。



(上) 2000年代に登場した複数管オカリナの一種であるトリプルオカリナ。口が1つのスタンダードなシングルオカリナ(下)より広い3オクターブの音域が出る



○プロフィール

1977年、岩手県宮古市生まれ。札幌大学吹奏楽団、高橋水産吹奏楽団Kilingenに所属しフルートを担当。第8回日本クラシック音楽コンクール大学生フルート部門全国大会入選。フルート講師となったときにオカリナと出会い、オカリナ奏者・大沢聡に師事。ピアニスト・小原孝のリサイタルや、国内外のオカリナフェスティバルなどに多数出演。大沢聡認定講師、認定演奏家

受賞歴

- 2014年 第2回楽しいオカリナコンクール ソロ部門第3位、ホンヤミカコ賞
- 2015年 第2回日本オカリナコンクール 独奏部門第1位、審査員特別賞
- 2016年 第4回楽しいオカリナコンクール アンサンブル部門第1位、第3回日本オカリナコンクール デュエット部門第1位
- 2019年 第20回大阪国際音楽コンクール 民俗楽器部門ファイナル第1位、グランドファイナル=ガラコンサート オーディエンス賞

<https://ocarina417haruna.jimdofree.com>

※今後のコンサートについては、こちらのHPで要確認

北海道ロケ作『許されざる者』の監督や道内の映画祭代表者を集めた「第1回北海道映画文化の未来会議」が8月23日、北海道立近代美術館で行われました。関連して、同作など北海道ロケ3本の特集上映をシアターキノで実施(8月22日～9月3日)。イベントを企画したNPO 法人北海道コミュニティ・シネマ札幌理事の中島洋さん、事務局の小野朋子さんに話を伺いました。



中島洋 (なかじまよう)
映像作家・シアターキノ代表

北大映研在学中から自主制作・自主上映を始め、北海道初のフリースペース「駅裏8号倉庫」など文化の「場」作りを重ねる。1992年に市民出資映画館「シアターキノ」を創設。その傍ら、芸術祭や映画祭、ワークショップなど多様な文化活動に関わる。2年前から映像作家・美術家としての制作活動を再開。7月の「記憶のミライ」展の後、来年から一年かけて北海道を舞台に短編映画を撮影予定。

中島洋

interview

小野朋子



小野朋子 (おのともこ)

新千歳空港国際アニメーション映画祭 チーフ・ディレクター

1976年生まれ、札幌出身。2007年より札幌でイベントスペースを有志と開設し、インディペンデント作品の上映やワークショップを開催。2014年より「新千歳空港国際アニメーション映画祭」のチーフ・ディレクターとしてプログラム選定と運営業務全般を行うほか、札幌映画祭をはじめ道内各地で上映会を多数企画する。札幌国際芸術祭2017 コーディネーターなども担当。

— 初開催に至った経緯をお聞かせください。

中島 北海道は映画の製作本数が東京に次いで多く、市民出資の映画館が3館、映画祭は6つもある。日本でも稀な土地です。映画文化の財産がたくさんあるということ、まずは広く知ってもらいたい。そして、もっと生かすための方策を、関係者が集まって考えよう、というのが狙いです。当たり前のように、意外とやってこなかったことです。

小野 私は「新千歳空港国際アニメーション映画祭」(以下、新千歳映画祭)に携っていますが、「道内の各映画祭が地方にもたらしているものは何か」を考える機会になればと思います。特に30回目を迎える「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」(以下、ゆうばり映画祭)は、冬から夏へと開催時期を移行した節目なので、今回のイベントを通して応援したいです。

中島 ゆうばり映画祭は、SFやホラーなどいわゆるファンタジー系の映画作家にとってはまさに「聖地」。運営し続けるのは大変ですが、なくしてしまうのは非常にもったいない。この価値を改めて見直したいです。

— ポストコロナにおける映画館や映画祭の今後のあり方について、どう考えていますか？

小野 今年はさまざまなオンライン映画祭を拝見しましたが、これまで届いていなかった観客層を含め新たな広がりにつながる機会となりました。ですが体験という意味で、臨場性への渴望を最も実感した半年間であったとも思います。

中島 オンラインを含めて、色々な方法を模索することはもちろん必要です。ただ、生の「場」が持つ有機性は絶対になくしたくありません。映画祭も映画館も、ただ静かに映画を観ているだけのようですが、言葉に表せない何かがある。音楽ならライブのようなエネルギーが生まれるんです。その可能性や今後の在り方について、意見を交わしました。

— 北海道の映画文化の展望や課題について、どうお考えでしょうか。

中島 白石和彌監督(旭川出身、『ひとよ』など)と初めて会ったときに、札幌の専門学校時代に何度もシアターキノに来てくれたことを知りました。映画館で自分の方向を見つけ、凄い作家に育ってくれた。こんな嬉しい、映画館冥利に尽きることはありません。ずっと応援している熊切和嘉監督(帯広出身、『海炭市叙景』など)に加え、三宅唱監督(札幌出身、『きみの鳥はうたえる』など)という若手もようやく出てきた。11月に新作『AINU MOSIR』をキノで上映予定の伊達出身・福永壮志監督も含め、今後が楽しみです。彼ら監督たちは故郷・北海道で撮りたいという思いを抱いています。実現の際には北海道のポテンシャルを最大限引き出せるよう、地元にいる私たちが応援したい。支援には、撮影許可や資金サポートなどを担うフィルムコミッションを運営する行政の関わりも大変重要になります。

小野 映画祭は観光・集客効果と同時に、ゲスト参加する作家たちがスポークスマンになってくれることも忘れてはなりません。映画祭で才能を見出された作家はその映画祭をずっと大切に考え、映画祭の名前を各地で言い続けてくれます。映画祭は続くことで知名度が上がり、波及効果が期待できるので。新千歳映画祭も、回数を重ねることで世界のスタジオや監督から認められるようになりました。今後も作品選定にこだわり、長く続けていきたいです。

中島 ロケ地でいうと、ジメっとしていない北海道の空気感、は特徴的です。地方的な風景がある一方で、雄大な自然も広がっている。撮ろうと思えば、湿原をアフリカにも見立てられる貴重な土地なのです。今回特集上映する『白痴』はそのロケーションを生かした典型で、原作のロシア・サントペテルブルクを札幌に置き換えた黒澤明監督の野心作。『許されざる者』『喜びも悲しみも幾歳月』と併せて、北海道の魅力を再認識してもらいたいですね。



ジン鍋アートミュージアム／ジン鍋博物館



かつての炭鉱町・万字で生まれ育った溝口雅明さんが、希少性とアートの視点で収集した約400枚のジンギスカン鍋を展示。昭和20年代後半から製造された鍋は、熱源や食べ方の変化に伴い溝の入れ方などが工夫され、高いデザイン性を持つにいたった。食文化の歴史と暮らしの物語が、そのデザインとともに見えてくる。

●岩見沢市栗沢町万字仲町8番地
☎090-7054-0971(溝口)

開館日:土・日のいずれか(4/29~11/11までの月1回程度)※公式Facebookで要確認 開館時間:10:00~17:00
<https://ja-jp.facebook.com/jinnabeartmuseum/>(公式Facebook)

そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター



空知の産炭地の記憶を受け継ぎ、未来へ繋げる活動の拠点。元炭鉱マン・齊藤靖則さんによる精巧な立坑の模型などを常設展示するほか、明治42年築の札幌軟石の蔵を利用し企画展を開催。2019年に空知を含む産業遺産「炭鉄港」の日本遺産認定を受け、6月から始まった「炭鉄港カード」の配布場所にもなっている。



●岩見沢市1条西4丁目3
☎0126-24-9901
開館時間:10:30~17:30 休館日:月・火
<http://www.mc.soratan.com/>

氷室冴子青春文学賞

80~90年代、少女小説の分野で新しい女性像を描き出した、岩見沢出身の作家・氷室冴子。自分らしく“今”を生きる個性豊かな主人公たちの姿に、多くの少女たちが共感し勇気づけられてきた。没後10年の2018年、市民有志がその名を冠した文学賞を設立し、青春をテーマに作品を募集。次世代の逸材の発掘が始まっている。

●特定非営利活動法人 氷室冴子青春文学賞 実行委員会事務局
岩見沢市有明町南1番地20 岩見沢市コミュニティプラザB1
岩見沢あかり家内
☎080-4387-0607(事務局長 栗林千奈美)
<http://seisyun-bungakusyo.com/>
※第3回の応募概要はHPにて発表予定

旅の画家が地域に残した美の遺産 岩見沢市絵画ホール・松島正幸記念館



左:21歳の画壇デビュー作「花を持てる少女」1930年
右:栗谷川健一(岩見沢出身)の企画展も開催された



昭和初期に建てられた歴史的文化遺産「旧岩見沢警察署」の一部を活用し、1990年に開館。レトロな雰囲気漂うなかに、岩見沢ゆかりの画家・松島正幸の作品が並びます。

松島は現在の深川市に生まれ、画家として名を成してから北海道教育大学岩見沢分校(現・北海道教育大学岩見沢校)の非常勤講師も務めました。「旅の画家」と呼ばれ、道内や国内はもとより海外にもよく旅をし、詩情あふれる風景画を描いています。後年はフランスの海辺のまち・カンヌにアトリエを構え、ヨーロッパを好んで描きました。9月まで開催の「日本の旅」展では、そんな松島の多くの風景画の中から、国内各地を描いた作品にフォーカス。北から南まで、人々の暮らしとともにある日本の風景美を捉えています。

2階の展示室では、道内作家を中心に幅広い企画展を開催。教育大とも連携し、毎年恒例の美術文化専攻による「明日への創造」展のほか、今年は、活躍が期待される学生の作品を取り上げた「ホープ展」を初開催する予定です。松島の生前の思いが届いたように、若い才能を育む場として、しっかりと地域に根付いています。

●岩見沢市7条1丁目7番地
☎0126-23-8700
開館時間:10:00~18:00(木曜は13:30~)
休館日:水、祝日の翌日、7月15日~22日(館内整理)、12月29日~1月3日
入館料:一般210円、高校・大学生150円、小・中学生 無料
<https://www.city.iwamizawa.hokkaido.jp/content/detail/1506246/>
※常設展、企画展、イベントのスケジュールはHPを要確認

次代の表現者となる、 若き才能が花開く青春のまち

石炭運搬を目的として開通した幌内鉄道とともに、空知の産炭地の基点として栄えた岩見沢市。大正時代には北海道の教員養成所が置かれ、その後、北海道教育大学岩見沢校となりました。2014年から「芸術・スポーツ文化学科」に変わり、教育者のみならずクリエイターを輩出する拠点となっています。そして若い世代が原動力となり、新たなまちの魅力が生まれています。

若き表現者たちの成長の場 北海道教育大学岩見沢校BOX [i-BOX]

JR岩見沢駅の西側、2階の一角に、広さ6坪にも満たない小さなスペースがあります。岩見沢市と北海道教育大学岩見沢校が協働で設置した施設 [i-BOX] です。学生による芸術活動などの情報発信の場として、また地域との交流の拠点として、2009年に誕生しました。市と大学が手を携えてこうした施設を運営するのは、全国にも例がなく大変ユニークです。

展示の企画やスペースの使用法は、すべて学生自身が考えます。「発火などの危険さえなければ、どんな実験的な展示でもOK」と笑うのは、担当職員尾崎芳子さん。普段は学内で希望者を募りますが、ときには地域ではあまり馴染みのない現代美術に取り組む学生にも声をかけているそう。絵画、彫刻、インスタレーションから美術以外の分野まで、幅広いジャンルの作品に触れる機会を市民に提供しています。

●岩見沢市有明町南1番地1
JR岩見沢複合駅舎内 有明交流プラザ2階
☎0126-35-1400
開館時間:10:00~12:00、13:00~16:00
休館日:12月29日~1月3日
入館料:無料
<https://i-campus.hokkyodai.ac.jp/i-box/>



個展を企画した加藤さん。
「展示の見せ方や役割を考える貴重な体験になりました」

美術・デザインコース4年で油彩画研究室に所属する加藤大幹さんは、静物画の個展を企画。来場者から予想外の感想が寄せられ、意外性と面白さを感じたといいます。学生にとっても、地域の人々から直接聞く感想は新鮮で刺激になり、モチベーションの高まりに繋がっています。市民参加型のイベントなどでは、[i-BOX]の目の前にあるセンターホールも発表の場として活用しています。学生は地域との関わりによって創造性を養い、若き表現者として、まちをアートによって活性化させようとしています。



公開制作に市民も参加した「岩見沢ねぶたプロジェクト」(2019)





生まれてはじめてエステに行った。コロナ禍で頭がおかしくなったわけではなく、本当に行きたくて行ったのだ。ただし、きっかけがあった。とある美術館のチケットの半券があれば、そのエステ店のどんなコースも半額になる、というキャンペーンが行われているのを、美術館に行った帰りに知ったからだ。

事前にホームページを見てコースを吟味したあげく、どうせなら高級なやつにしてやろう、と80分18000円のコースを申し込んだ。半額になるから9000円。それでも、自分にとって「安い」とはまったく思えない。そもそも自分の肌は度重なるヒマラヤ遠征によって、酷使され続けてきた。それに加えて、43歳という年齢もある。ときに強烈な紫外線に晒されてきた顔面は、歳相応に疲弊している。最近では風呂上りに化粧水こそつけるようになったが、30代になるまで男が化粧水をつけるなんてアホか、と思っていた。ともかく、傷め続けてきた肌を、ヒマラヤ遠征が中止になって時間ができたこの夏に少しだけ労わってみるか、と半額チラシをもらった瞬間に思ってしまったのだ。相当暇だったの

かもしれない。施術中は、ひたすら気持ちよかった。よくわからないベトベトの液体を幾重にも塗り重ねられたぼくの顔は、指で触れてあきらかにわかるほどツルツルになった。

何をとち狂ったか、ぼくをエステに行かせてしまうほど、夏の予定が飛んでしまった。本来なら今頃バキスタンに行つてカラコルム山脈の奥にあるK2の雪壁にしがみついている頃である。これまで全速力で走り続けてきた人生だ。為す術もなく停滞した夏が一回くらいあってもいい。そう言い聞かせながら、今後繰り返し思い出されるであろう「2020」という特別な年が、ゆらゆらと後ろに過ぎ去っていく。



石川直樹 (いしかわ なおき) 写真家

1977年東京生まれ。2011年『CORONA』(青土社)により土門拳賞。2020年『EVEREST』(CCCメディアハウス)、『まれびと』(小学館)により日本写真協会賞作家賞を受賞。著書に、開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』(集英社)ほか多数。2020年には『アラスカで一番高い山』(福音館書店)、『富士山にのぼる』(アリス館)を出版し、写真絵本の制作にも力を入れている。

※次号のエッセイも石川直樹さんが担当します

| 表紙作家の紹介 |



北村太 版画家
Futoshi Kitamura

1978年 石川県生まれ 金沢市で育つ
2003年 年賀状をきっかけに木版画の創作を始める
2020年現在、札幌市在住

[主な展示]

- 2011年 個展「A to Z 日常」 喫茶室豆灯/美幌町
- 2012年 個展「A to Z 日常」 古道具十一月/札幌市
- 2013年 個展「暦」 喫茶室豆灯/美幌町
- 2014年 個展「食べる」 喫茶つばらつばら/札幌市
グループ展「cute」北広島市芸術文化ホールギャラリー/北広島市
- 2017年 個展「夜のはなし」 喫茶つばらつばら/札幌市

◎北海道文化財団アートスペース企画展 vol.44

北村太版画展 「旅の途中」
会 期：2020年8月11日(火)～10月30日(金) 9:00～17:00
休館日：土・日・祝日 ※都合により臨時休館する場合があります。
会 場：北海道文化財団アートスペース
(札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F)
入場料：無料



財団事業インフォメーション (2020年9月～2020年11月)

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、公演やイベント等の開催が変更または中止になる場合があります。
公演等の実施については、事前にそれぞれの問い合わせ先にご確認ください。

新進アーティスト育成事業

●「HAFアンサンブル」北見公演

日 時: 2020年10月28日(水) 開演19:00
会 場: 北見芸術文化ホール
入場料: 500円(全席指定)
問い合わせ: 北見芸術文化ホール ☎0157-31-0909

フルート&ピアノ



フルート
南加奈子



ピアノ
野口咲妃



フルートカルテット



フルート
按田佳央理



ヴァイオリン
林ひかる



ヴィオラ
今井佑佳



チェロ
山田慶一

アートシアター鑑賞事業

●Ezo'nコンサート～歌姫～

日 時: 2020年9月27日(日) 開演13:30
会 場: 大樹町生涯学習センター
入場料: 2,000円
問い合わせ: 大樹町芸術鑑賞協会 ☎01558-6-5555

●清水ミチコトーク&ライブ2020

滝川公演
日 時: 2020年9月6日(日) 開演16:00
会 場: たきかわ文化センター
入場料: 3,500円
問い合わせ: NPO法人空知文化工房 ☎0125-23-1281

●壮瞥町公演

日 時: 2020年10月18日(日) 開演16:00
会 場: 壮瞥町地域交流センター
入場料: 4,000円
問い合わせ: 壮瞥町地域交流センター
運営ボランティア実行委員会 ☎0142-66-2131

●「よったり寄ったり競演会」～東と西の落語～

日 時: 2020年9月26日(土) 開演13:30
会 場: 帯広市市民文化ホール
入場料: 2,500円
問い合わせ: (一財)帯広市文化スポーツ振興財団
☎0155-23-8111

まちの文化創造事業

●特別展「生誕100年|ロボットと芸術～越境するヒューマノイド」

会 期: 2020年7月18日(土)～9月13日(日)
会 場: 苫小牧市美術博物館
入場料: 一般600円、高大生400円、中学生以下無料
問い合わせ: 苫小牧市美術博物館 ☎0144-35-2550

●第7回 いっしょにね!文化祭

日 時: 2020年10月3日(土) 開演12:00 終演16:30
会 場: 北翔大学北方圏学術情報センター札幌円山キャンパス
(多目的ホール、ギャラリースペース)
入場料: 一般500円、高校生以下無料
問い合わせ: 特定非営利活動法人三角山 ☎011-676-3955

●2018-2020北方のいろ共同制作ワークショップと国際天然の色展

会 期: 2020年9月20日(日)～22日(火、祝)
会 場: モエレ沼ガラスのピラミッドスペース1、2
入場料: 500円
問い合わせ: アースネットワーク ☎0134-25-1470

芸術文化交流事業

●文化提携交流事業

演劇ユニット41×46『雨の隨に』

日 時: 2020年11月7日(土) 開演18:30
2020年11月8日(日) 開演13:30
会 場: 扇谷記念スタジオ シアターZOO
入場料: 一般2,000円 学生1,000円
問い合わせ: 代表 館(たて) ☎090-6216-1459

人づくり一本木基金事業
(長原實・ステウレ・エング人づくり基金)

●ものづくり一本木選奨の募集

「人づくり一本木基金」の顕彰事業として、工芸美術及びものづくり等の分野における功績が顕著な方々への推薦を募集しています。

顕彰名: ものづくり一本木選奨

「長原賞」	1件	賞金50万円
「地域貢献賞」	1件	賞金30万円
「奨励賞」	2件	賞金10万円

対 象: 道内を拠点に活動を行う個人及び団体
募集期限: 2020年12月4日(金)※消印有効
募集詳細/問い合わせ: 北海道文化財団「人づくり一本木基金」
ホームページをご覧ください。
<https://haf.jp/ippongi/index.html>